月坡道印と小澤蘆庵の「十牛図」

伊藤　達氏

はじめに

本紀要第二十一号において「十牛図をめぐる和歌―寛永六年版本及び近世初期堂上歌人の歌を中心にして―」と題し、寛永六年版本の『四部録』所収「十牛図」に掲載される二十首（各図二首）について、廓庵の序・頌及び石鼓希夷・壊衲大璉の和韻との比較・検討を試みた。大よそは序・頌、二首の和韻と通底するものの、一部それらと相反する歌、序以下の詩句に拠らない歌もあることを指摘した。近世期の「十牛図」の受容は五山版に掲載されていた序・頌と二首の和韻と挿絵に、寛永六年版において新たに歌二十首を刻した体裁で行われており、以後の各版も当該版本の形式を踏襲している。併せて川瀬一馬氏が報告する大東急記念文庫蔵の室町期の古写本『四部録』所収「十牛図」に記される十首の歌[1]と頌・和韻及び版本掲載歌との関係を見た。また後西院以下、十人の堂上歌人が各図一首ずつを詠じた詠歌を畑中盛雄の『類題法文和歌集注解』（寛政二年成）を手掛かりにしながら十首の歌について触れた。

前稿においては右記の二点を中心にして「十牛図」をめぐる歌について触れたが、本稿では近世初期及び以後の

「十牛図」を基に詠まれた詠作を見ていくことにする。「十牛図」の注釈としてははやく鎌倉末期の臨済僧痴兀大慧（一二二九～一三二二）に『十牛訣』（応永九年成立／正保二年刊）があり近世初期に刊行されており、萬安英種の『四部録抄』（寛永十年刊）、駿陽山人の『首書四部録』（元禄十一年刊）が備わり「十牛図」の注釈も初期に行われていた。「十牛図」に関係する文学作品としては、曹洞宗の僧月坡道印の『うしかひ草』、小澤蘆庵の版本掲載歌に対する批評と自ら詠じた歌、叢書類に収める二種の詠作が存する（叢書類に所収される詠作については前稿を参照）。月坡の『うしかひ草』は近世初期に流行した仮名草子の一書であり、寛文九年（一六六九）京の書肆西田庄兵衛より刊行されている。「十牛図」をモチーフとし、貧家の息が父から譲り受けた牛を失い、それを求め山野を彷徨し、探し出した牛を飼い馴らし再び家に戻り市に出て行くという構成である。『うしかひ草』は全十二図を設けており、この点「十牛図」とは相違し二図を新たに創作している。各図の末に歌二首を附し全二十四首を掲げており、散文と韻文から成る。「十牛図」をめぐる詩歌は当該図が頌によって示されているように、中世期以来韻文を主とするものであった。が、月坡は韻文（歌）と併せて散文を採用しており、当該図を基にした作品が詩作を軸として展開してきた歴史に散文による表現を新たに加えていることになる。[2] 月坡は僧侶であり、偈頌・漢詩を多く作しており、詩作によって当該図の趣意を表現するのが通例と思われるが、和文体・和歌という二種の和の表現形式によっているところに特色がある。蘆庵は十八世紀後半に活躍した京の地下歌人であり、堂上歌人とは異なる歌論・歌風を唱えた人物だが、自筆本『六帖詠藻』（静嘉堂文庫蔵）に版本掲載歌を批評し、歌意に不審があるものについては指摘した上で、新たにその図の趣意に合うように詠み直している。版本掲載の歌が当期の歌人の目にどのように映り、理解されていたのかを窺う上で貴重な発言であると思われる。

本稿においては右記の作品を通して「十牛図」をめぐる歌がどのように表現されているかということについて見

ていきたいが、ここで近世期の「十牛図」の受容について確認しておきたい。このことについてはすでに先学の研究によって明らかにされているが、本邦においては中世期以来廓庵の「十牛図」が行われていた。本稿で取り上げる作品も廓庵の「十牛図」に拠ったものである。近世期の禅僧による「十牛図」を詠じる漢詩についても廓庵「十牛図」によるものである。一方、中国では廓庵のそれではなく、普明の「牧牛図」が広く行われていた。両図とも十図であり、牧人と牛が織りなす一連の図が展開されているが、標題・内容は異なり廓庵と普明の差異が表われている。普明「牧牛図」は明代の僧雲棲袾宏が序を附し万暦三十七年に刊行したものだが、近世初期本邦に伝来し、『新刻禅宗十牛図』と題して明暦元年（一六五五）に刊行されている。この「牧牛図」に拠る詩作としては東皐心越（一六三九～一六九五）の「蓮池大師禅宗十牛図、嗣普明禅師韻」があり、清水春流に「牧牛図」の牛を馬に替え、春流の七絶と寒渓の和韻を附した『儒家十馬図』（延宝二年刊）が存する。近世期は普明の「牧牛図」を基にした作品も見られるものの、主流としては廓庵の「十牛図」が受容され、前記の作品が生み出されていったのである。

一、『うしかひ草』の研究史

月坡（寛永十四年〈一六三七〉～享保元年〈一七一六〉）は近世初期の曹洞宗の僧である。月坡の経歴について簡略に記して置く。近江大津の人で、八歳で薙髪し、若年一時黄檗山に上り隠元隆琦・木庵性瑫に謁したこともあり、寛文四年近江比良山獅子谷に庵を結び、同七年には関山（逢坂山）に居を移し山水を友とする生活を送った。同九年に竜睡愚穏の勧めで永平寺に上り首座となり、寛文十年金沢献珠寺に入り、延宝四年、山居の詩を詠みその風騒に感心した徳川光圀に請われ水戸の岱宗山天徳寺に赴き僧衆を指導し、天和元年金沢天徳院に転院し竜睡を継ぎ三

世となり、元禄元年に京大宅寺に退いた[3]。語録に『月坡禅師住加賀州黄竜山献珠禅寺語録』（延宝五年刊）、『月坡禅師住常陸州岱宗山天徳禅寺語録』（延宝八年刊）などがあり、詩集に『菴居全集』（三巻一冊・寛文十二年刊）、『霊隠図誌』（元禄五年序刊）、『南去北来』（三巻一冊・元禄十四年序刊）、漢詩・和歌から成る紀行文『手ごとの花』（元禄期刊）がある。月坡は多くの詩をものした詩僧として知られており、岡田宜法氏は「月坡師は大智以来の詩星として、宗門屈指の宗匠である」と評する[4]。月坡の詩作・詠作については後に触れたいが、月坡は詩のみならず『手ごとの花』に見られるように和歌も詠じていた。近世初期に僧侶であり詩作の傍ら和歌を詠じた人といえば日蓮宗の元政が想起され、家集に『草山集』（寛文十二年刊）がある。一方月坡には家集はないものの、自己の表現様式として和歌をも取り込んでいる。『うしかひ草』は和文・和歌から成り、各章末に二首の歌が詠まれており、当該作品において重要な役割を担っている。

本文を見る前に『うしかひ草』の内容と研究史について確認しておきたい。当該書は寛文九年に仮名草子の一書として刊行されており、廓庵「十牛図」をモチーフとするものの、廓庵の序・頌、二首の和韻の詩句は直接は文章・和歌には反映されていない。題と挿絵については月坡が新たに附した二章（「こゝろをおこす」「いゑをいづる」）を除きほぼ廓庵「十牛図」のものと同趣向である。但し、「うしをうる」の挿絵は徐々に黒牛が白牛に変化し、「うしをかふ」では半分程白く、「うしにのる」で完全に白牛に化している。廓庵のそれが黒牛に対し普明「牧牛図」は「受制」から徐々に白く変化し「無碍」で白牛に化す。『うしかひ草』は挿絵の意匠は廓庵の図によるものの、黒牛から白牛への変化は普明「牧牛図」に倣っており、この点は普明の意匠を取り入れている。人物については文章で「子」とされており挿絵も青年の姿だが、十一章「家にかへる」では老人の姿で描かれており、この点は廓庵・普明のどちらとも異なる。構成については全十二章からなり、各章比較的短い和文体の文章が記され、最後に文章と相通する二首

の和歌が記されている。各章は一章ずつ正月から十二月に割り当てられており、文中に月名が記され、各季節の推移・景物を記しながら廓庵「十牛図」による一連の物語が展開されている。各章と月名を照応すると、「こゝろをおこす」正月（むつき）、「いゑをいづる」二月（きさらぎ）、「うしをたづぬる」三月（やよひ）以上春、「あとを見る」四月（う月）、「うしを見る」五月（五月雨）、「うしをうる」六月（みなづき）以上夏、「うしをかふ」七月（文月）、「うしにのる」八月（は月）、「うしをわするゝ」九月（長月）以上秋、「うし人友にわするゝ」十月（神無月）、「家にかへる」十一月、「いちくらに入」十二月（しはす）以上冬である（（）内は本文の表記）。なお本書に月坡の記名はないが、柴山全慶氏が指摘されるように、序文の「月波」は「月坡」の誤字であり、序文を請うた元湛なる僧も禅学辞典・禅学要鑑の解題に月坡の侍者としてその名が見えることを報告される。序者の「湖南隠士観海」についても寛文七年に月坡を関山の蝉丸旧址の庵に拝請した一善信であると推定する。[5] 各図も観海の手になるものである。

本書の紹介は柴山全慶氏が昭和三十六年に「宇しかひ草に就いて」において全文を挿絵とともに翻刻され解説も付し、自然描写がその月々の季節に合わせて書かれており、禅書というよりも草双紙風の風流書の内容であることを指摘し、廓庵「十牛図」と大きく異なっている点については、廓庵の図の牧人は変化しないのに対し、本書は第一章では青年として描かれているが、最終図では童心に戻った「老翁」になっており、「十牛図」の第十図「入鄽垂手」の「痴聖の遊戯」を「童心の遊戯」の相で示しているとされる。また本書の牛が廓庵の牛と同じく、「心牛」であることは変わりないが、「黒白（染・浄）」の変化が意識的に示され、月坡の牧牛視に「染・浄」の思想を有していることと、廓庵の牧牛観が「得・失」にあることを対比される。最後に「月坡は〝うしかひ草〟の図章の進展に、廓庵十牛を摸しながら、その牧児観や牧牛観は、清居や普明の牧牛図に倣らつたとみることができる。」とする。[6] 本書の基礎的様相が簡潔に挙げられており、廓庵の「十牛図」及び普明の「牧牛図」との関係の指摘も貴重であった。

柳田聖山氏は本書について「その全体の構成を廓庵の「十牛図」によりながら、さらに二章を加えて十二図とし、これを四季に配していることである。湖南隠士観海による図もまた黒牛の白に変ずる趣きを加えて、他の牧牛図の思想を綜合しつつ、人牛ともに忘れたところより、ふたたび家にかえり市に入る、廓庵の主題を忠実に迫っている。」とし、本書成立の寛文八年は月坡が比良山（獅子谷）に庵居していたころで、作品から窺われる近世文人風の風流韻事の生活態度はその実際から出たものであるとされる。和歌についても一般市井の読者を予想してのことであり、版本掲載歌の歌よりさらに一般化されて道歌風であると評される。[7] 本書成立時の月坡の境涯を想起されたことは貴重な指摘であるが、月坡の詩作との関連は後に触れることにしたい。

次いで中村文峰氏は国立国会図書館本を底本とし、解題、全文の翻刻及び現代語訳と、各章を禅宗の視点から見た解説も附した書を刊行された。[8] 本書の研究史の中で現代語訳も施されたことは画期的なことであった。氏は普明の図が漸修を重ねて宗教的絶対の境地を「隻泯」（空白）で表すのに対し、廓庵はこれを理想の境地とせず、「理想の自受用的世界「返本還源」と、他受用的世界「入鄽垂手」」の二章を加えているとし、「「うしかひ草」は、この両者の思想を兼ね併せて文章と挿絵で示している。」と結論付けられる。なお巻頭に廓庵「十牛図」・『うしかひ草』・普明「牧牛図」の各図の照応と、三書の挿絵を対比させている。また湯浅佳子氏は廓庵「十牛図」と本書の内容を対比した上で、「このように本書では「十牛図」をもとに、男の心が牛や自然と時に離れ、あるいは一つになりながら、またそれらと同じように移ろっていく様子を描いているのである。」と全体図を見渡している。[9]

本稿では諸先学の調査・論考を基に『うしかひ草』について見ていきたいが、あまり触れられることのなかった文章と和歌、あるいはそれらの関係を本文に即して触れることを主な課題としたい。なお本書は『假名草子集成　第六巻』（東京堂出版）に所収されているが、本文の引用は駒澤大学図書館本に拠る。[10]

二、『うしかひ草』の文章と和歌

本書の特質はすでに序文中に記されており、

廓庵の十牛になぞへて、かりに十二の関をもうけ、四季のおもむきをのべて、うしかひ草と名づけたまひぬ。春は山路に花をたづね、夏は河べにほたるをうつより、あきは月にうそぶき、ふゆは雪をながむるまでにやさしき言葉がきして、こゝろありげに見ゆる歌よみたまへるは、わがくにのならはしなればなるべし。中に一じの禅をとくなく、一句の法をのぶるなし。頂門にまなこを具する人にあらずは会しがたからむ。

とある。廓庵「十牛図」に擬し、季節の推移に仮託し、書中に禅の趣意を思わせる言句を用いずに本書が著されていることを記す。本書の真意を理解するには「頂門眼」―真実を見抜く眼識―を要するともある。「十牛図」を所収する『四部録』は寛永六年に開版され、以後本書刊行（寛文九年）までに版を重ねているので、廓庵「十牛図」の趣向に拠っていることは当時の読者にも広く認知・受容されたであろう。各図二首の歌も寛永六年版本が各図に二首掲載することに倣っているものと思われる。また書体も定家様であり、ことさら歌書風を装っていることも注意される。

「こゝろをおこす」「いゑをいづる」の二章は月坡が新たに附した章である。「こゝろをおこす」において、「むかしおうふミの国に、ものつくれる人のいとまづしげなるが、子ひとりもち侍き。ときはむつきのはじめつかた、春とはいへどなをさむけく……」と書き始められ、場を近江国、貧農の父とその子、季節は睦月に設定される。場を近江国とするのは月坡の生地であり、本書執筆時比良山下に庵住していたためであろう。この後に、父一人でさへ生計

を立てかねるので二頭の牛を子に与え野飼いするようにいうが、子は牛の扱いに馴れておらず失ってしまう、怒った父は子に牛を探し出すように命じ、子は探し出すことを決心する。廓庵「十牛図」の第一図「尋牛」は「従来不失、何用追尋……（従来失せず、何ぞ追尋を用ひん）」とあり、頌・和韻ともに牛を探す動機については示されていない。月坡は当該図を新たに散文化するにあたり、主人公を貧農の子とし、生活のために父から与えられた牛を馴れぬ業のため失ってしまい、父の叱責に従い探し求める決意を記すことは、人と牛の関係を具体的に作り出そうとしているものと思われる。第二章「いゑをいづる」は父の教えに従い我が家を出る場面だが、最後に見送る父と見送られる父子の会話があるものの、大方は季節描写にあてられている。「こゝろをおこす」「いゑをいづる」の季節描写と和歌を掲出する。

ときはむつきのはじめつかた、春とはいへどなをさむけく、おりかけがきの梅の華も、ゆきいたふつもりて、このめわか草などもめぐみあへず、空ほのかすミたるに、うぐひすもいまだなかず。いにし年のちかきゆへにやなどおもひつゞけて、すみわびたるあやしの竹のあミ戸のひまあらはなるが、もりくる月もさむしろにいもねて、おや子うちむかひゐける。

あぢきなくうきわがやどの花にめでゝ
いくとしはるを過しきぬらむ
あだし身をおしともいまはおもほえず
うきたつはるのこゝろならひに

（「こゝろをおこす」）

（こゝろをおこす・7オ）

はやきさらぎもなかばすぎて、小田かへすべきときいたりぬ。かたぐ〳〵水まかするに、かはづもなき、こてふ、ことりなどのさへづりまふもおかし。かきほのむめうつろひながらちりのこりたる、またのとしならではなどおもひつゞくれば、かたへにさくらのはつ花ところ〴〵わざとならぬ庭のさま、すべてミすてがたく、すミなれたる草ののきば、いかでたちいでむと、

いかにせむちりのこりたるのきのむめの
華ばかりさへすてがたき世を
人のミか春はわかれのいとゞうし
いかにミすてむのきのはつ花　（「いゑをいづる」）

（いゑをいづる・9オ）

「こゝろをおこす」は早春の景物の梅が出てくるものの、まだ春になりきらない情景を記し、「あぢきなく」歌は辛い我が家ではあったが梅の花を賞美し幾く春を過ごしてきたのか、と詠み、「あだし身を」歌では春を迎えた喜びのためはかないはずの我が身も今はそうとは思うことはない、と詠む。「いゑをいづる」は二月、仲春の情景を文章で描き、「いかにせむ」歌は散り残っている梅の花だけでも見捨てがたいのに、どうしてこの世を捨てられようか、と今までの生活への未練の心中を詠み、「人のミか」歌では梅の花に託し家との別れを詠む。早春・仲春の光景・景物を文章で記し、歌において人物の心境がその景物に託し表現されている。特に「あぢきなく」「あだし身」の歌は梅の花を愛し、春の陽気に励まされるという風流心によってこの物語が展開することを示している。なお「こゝろをおこす」は〝発心〟、「いゑをいづる」は文字通り〝出家〟を意味していると思われる。本書の主意は第三章「うし

をたづぬる」以降にあるが、当該二章は導入部にあたる章と言え、牛を得た理由、それを失い探し求める事情が開陳されている。先述したように、廓庵「十牛図」では突如牧人が牛を探し求める図から始まるが、月坡は十牛図を散文化するにあたり二章を新たに追加し、当該図にはなかった、物語の発端の具体的な場、人物の環境、牛を探す動機を創作する。

「うしをたづぬる」以降の各章は当該月の季節描写と主人公の姿・心境が描かれており、各章廓庵「十牛図」の「尋牛」以下に当たる。各章の文章と和歌を抄出する形式で見たいが、「うしをたづぬる」は全文を掲出しておきたい。

すミなれしあやしの竹のあミ戸をいでゝ、ときしもやよひばかり、いとめなれぬ山ざとなど、こなたかなたまどひありきぬれど、ミしれる人もなく、あしにまかせてゆくに、やゝ春ふかくかすミわたり、花もやう〳〵さかりをえて、えむなる空見すぐしがたきを、けふミずはなど、おもひつゞけてゆくに、わか葉の木かげにふぢ、やまぶきのさとかほりて、きよらにさきミだれたる、こゝろよからぬかは。つばなまじりのすミれをひわたりたるさま、ミちのべおぼつかなかくも、うしのゆくゑとめたどる、めもくれこゝろもくれぬ。いざや、かばかりゆきかたなからむと、はたこえ、谷こえあされども、つや〳〵ものも見えず。いかばかりこゝろのうちくるしかりけむ。

（うしをたづぬる・11オ）

おぼつかななにをしるべにはるのやま
のがひのうしのあとをとむらむ
こゝろうしたづぬるかひもなきものを
さくらがりとや人のミるらむ

まず当該月の景物を描写し、人物の姿・心境が作者の視点で述べられる。当該章は三月に配当されているので、「やゝ春ふかくかすミわたり、……」と深まる春の光景を記し、同時に晩春の景物である「ふぢ（藤）」「やまぶき（山吹）」を織り込んでいる。最後にあてどなく彷徨う人物の心境を描き、二首の歌が章を締めくくる形で詠まれている。一首目の措辞・歌意は文中の「ミちのべおぼつかなかくも、うしのゆくゑとめたどる、めもくれこゝろもくれぬ。いざや、かばかりゆきかたなからむと」と相通し、二首目は牛と憂しを言い掛けるが、「はたこえ、谷こえあされども、つやくものも見えず。いかばかりこゝろのうちくるしかりけむ。」と通じる。

このように各章、当月の季節の光景・景物、人物の心境を織り交ぜながら、最後に二首の歌において文章と相通する歌を示すという形式によって進行している。次に先行歌との関係や注意を要する歌について取り上げたい。最初に「あとをみる」の一首ついて見る。

あとはあれどなをゆくすゑのしらまほし
やまほとゝぎすミちしるべせよ

廓庵「十牛図」では「見跡」（第二図）に当たるが、牛の行方を郭公に尋ねる歌が詠まれている。郭公に道しるべを乞う趣向の歌は古歌に存する。

夏

さ月くる道もしらねど郭公なく声のみぞしるべなりける（貫之集・二五六）

中納言行平家歌合に　　よみびとしらず

すむさとはしのぶのもりのほととぎすこのしたごゑぞしるべなりける（新勅撰集・夏歌・一四四）

郭公何方

踏みまよひしらぬ山路の時鳥里のしるべか声の行方（称名院集・四五〇）

また慈円には、

郭公

もろともにかたらひおきて郭公しでの山路のしるべにもせん（拾玉集・二〇）

と、〝死出の田長〟の別名も持つ郭公に死後の道案内を乞うた歌もある。当該章の文中に「山ほとゝぎすの一声おちくるけしきばかりにて、いづちともなくゆきがたしらずなりにたり。」とあり道を失ったことが記され、歌では「山ほとゝぎす」に標を乞うている。

かたちのミ見てやゝミなむさなへとる

山田のはらにあがきするかな

左記は「うしを見る」（廓庵十牛図―「見牛」）の二首目であり、第一・二句の措辞は、

よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲（新古今集・恋歌一・読人しらず・九九〇）

の第一・二句が想定されよう。文中では「かたへのおかはるかなるほどに、おどろ〳〵しくもはふるなる、（中略）こゝろもときめきいきもつきあへず、はしりつおもへば、おそれてにげなむものをと、らうがはしからぬやうにしづ〳〵あゆみける。」と、牛を見とめ逸る心を抑えながら牛に近づく心境が描かれている。もう一首先行歌との関係を「う

し人友にわするゝ」（廓庵十牛図―人牛倶忘）から一首目を見たい。

はれもせずくもりやらずはつかあまり
見る人もなきふゆのよの月

一見して大江千里の「てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき」（千里集・不明不暗朧朧月・七二）の第一・二句が思い起される。但し、同じ月を詠むにも本書は誰も賞美しない冬の月、千里は春の朧月を主題にしておりその点は相違するが、この一首は千里歌を念頭に置き詠まれたものと思われる。なお文中には「ミやこのかたに初ゆきなどいひて、もてきやうずる人もあなれど、月さへはれくもりて、千どりのかよふミちすらたふるばかりなり。」とある（雪と千鳥は二首目に詠まれる）。

次に「うしをうる」（廓庵十牛図―第八図「得牛」）を見たいが、いよいよ牛を捕らえ飼い馴らす章である。湯浅氏は本書の挿絵について『新刻禅宗十牛図』の「未牧」（普明「牧牛図」の第一図）の図と同様であり、本書が普明の「牧牛図」の影響を受けていることがわかると指摘する。[11] 円相の後方に繋がれた牛、前方にそれを調教する人物、右上に雷雲と雷光が描かれており、これは廓庵の「得牛」の図にはなく、湯浅氏の指摘のごとくである。文中には「雷」に関する言は見えないが、一首目の歌に、

とらへぬるうしのこゝろはかミなりて
ゆふだつそらのけしきとぞおもふ

（うしをうる・17オ）

とあり、「かミなり（神鳴り）」てと詠みこまれ、『新刻禅宗十牛図』の挿絵をもとに当該歌が詠じられている。当該章の趣意は廓庵の「十牛図」によりながら、挿絵に関しては『新刻禅宗十牛図』の影響を受け、詞としては一首目の歌に挿絵の「雷」が詠まれている。当該章の挿絵・和歌一首は普明「牧牛図」に拠るという本書中において特異な章である。

廓庵「十牛図」の第九図「返本還源」は本書では第十一章「家にかへる」にあたるが、廓庵のそれは万物の根源に返ることを表した大悟の境地であり、序・頌、和韻ともにその境地が詠ぜられる（挿絵は円相に空白）。本書では宗教的境地については記されず、誰もいない故宅の荒れ果てた様子を記し、「やり水のこほりにおちばのかたよりとぢて、しづくのをとなひもたふるこそ、見るめもわびし。かべあらはに、さむきあらしのうちふゞきたるならでは、ことゝひかはす人だになくて、中〳〵あらるべしともおもほえず。」と冬十一月の情景を記し、その後に、

いまめしからぬ庵のをざゝ、松のいろむかしにかはり（たるさまも）見えず。すべてなにとなくすミなして、わざとならぬこそみどころおほけれ。

いたづらにあられふる也わがいほの
庭のをざゝのいろはかはらで

そめねどもをのがいろ〳〵をのづから
ゆきはましろにまつはミどりに

という文章と和歌で結ぶ。二首目の「そめねども」歌については、版本掲載歌の「染ねども山ハミどりになりにけりをのがいろ〳〵花もなきなり」の上句の措辞・と趣向が相通する。廓庵の頌は「庵中不見庵前物　水自茫茫花自紅（庵中には庵前の物を見ず、水は自ら茫茫花は自ら紅なり）」とあり、版本掲載歌「花もなきなり」と相反する。

本書では当該章が十一月に配当されるため「花」は詠まれないものの、雪の白さと松の緑が対比されている。雪と松の取り合わせは和歌・画題に好んで取り上げられるが、一般によく知られた構図で詠まれている。

最後に第十二章「いちくらにいる」を見たい。廓庵「十牛図」では第十図「入鄽垂手」にあたる。大悟した後市井に出、衆生を教化する場面である。五山版及び近世期の版本も布袋に似た人物が青年と対面している挿絵が描かれ、一方本書では童心に返った老人が団扇を持ち子供三人と戯れている姿で描かれる。

（上略）むねあらはにかたぬきはだし、つるはぎ、ふくべなどこしにつけほゝえミたてるを、いち人子どもなどのわらひあへるもおかし。たなによりゐて、すゞろにとありかゝりと、ものうちいひつ（ゝ子ど）もどち、をどりもてゆくミちすがらうたひける。

ふれ〳〵こゆきたむばのこゆき、
いたいどのとゐどの、とゐどの、とゐがむすめ、かぢはら、
てふち〳〵、あは〳〵、かぶり〳〵、しほのめ、あいやの、
ほろ〳〵
春ちかきとしのくれなりおもしろし
をどれやをどれをどれうなゐご
わが年のおひにけるかないくつねて
はるになるぞと人にとふまで

（いちくらに入・27オ）

道すがら子供と歌い戯れる様を記し、二首の和歌の前に童謡めいた詞章が置かれている。「春ちかき」歌は文中の

子供との戯れを詠み、「わが年の」歌は正月を待ちわびる童心を詠じている。柴山氏が「痴聖の遊戯」を「童心の遊戯」で示しているとされたことがわかる。[12] ここで注目したいのは歌の前の童謡めいた詞章である。「ふれ〳〵こゆきたむばのこゆき」は『讃岐典侍日記』に幼童の鳥羽天皇が口遊んだ詞として「降れ、降れ、こ雪」の詞が見え、『徒然草』第一八一段には「『ふれふれこゆき、たんばのこゆき』といふ事、米舂きふるひに似たれば、粉雪といふ」とあって、たまれ粉雪と言うべきところを「たんばの」と誤り、「垣や木の股に」と謡うべきだとある物知りの説を紹介し、「鳥羽院幼くおはしまして、雪の降るに、かく仰せられけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり」とある。[13]『讃岐典侍日記』が記し『徒然草』が考証するよく知られた古代童謡であるが、『徒然草』は慶長年間に古活字本が開版され、元和・寛永年間には整版本が上梓されており、近世初期から広く読まれている。当時の一般読者に愛読された『徒然草』掲載の鳥羽天皇ゆかりの詞を掲げることで、読者に童心に戻った人物の心境を印象付けようとしているのであろう。次の「いたいどの〜かじはら」の言葉は林羅山の徒然草の注釈書『野槌』（元和七年成立）に引用されており、前記第一八一段の俗謡の例として、鎌倉時代、頼朝の政治を諷刺したものとして、

橋の下の菖蒲は、折どもおられず、かれどもかられず、伊東殿、土肥殿、土肥がむすめ、梶原源八、介殿、のけ太郎

という俗謡を掲げる。[14] 羅山は菖蒲を範頼にたとえその無用を諷刺し、「伊東殿」以下は当時の有力武士を頼朝が丁重に待遇したことを指すとする。『野槌』は慶安年間に刊行され以後版を重ねており、徒然草の注釈書として馴染み深い書であった。この二種の童謡は『徒然草』とその注釈書『野槌』に拠るものであり、それらを並列させ、童心に戻った心境を表すのに用いられている。

次の「てふち〳〵」以下は幼児語をならべており、「てふち」は両手を打ち合わせ子供をあやすこと、「あはく」

は軽くあけた自分の口を手のひらでたたくしぐさ、「かぶり」は幼児が頭を左右に振ることである。歌謡集『松の落葉』「祭文」（巻第三・十三）に「此の時に至りて地蔵菩薩の御守り、寵愛ことに浅からず、ちやうちゝあわゝ、かぶりくしほの目」とあり、これは当時の歌謡の文句を引用している。[15]「あいやの、ほろゝ」の「あいや」は足や歩行の幼児語であり、「ほろほろ」はのんびり歩くさまを言う語である、紀海音の浄瑠璃『三井寺開帳』に「取だちをなさるればどうぞあるかしましとふてざうりわらんづ作りつゝ、手を引きあいやのぼらぐゝや」とある。[16]ここは歌謡・浄瑠璃中の幼児語を用い人物の童心を強調しているといえよう。

以上、全章には触れ得なかったが、本書の構成、文章・和歌との関係、最後に童謡を用いていることを見た。仮名草子の中には季節の景物を縷々と述べ、ある事柄を言い表そうとするものがある。例えば、『小倉物語』（寛文元年刊）は猪名野篠之丞と初花の恋愛・出家往生譚であるが、上巻冒頭に篠之丞の邸宅を四季の推移によって表現し、その王朝風の雅やかなありようが記されている。物語の筋には直接関係しないものの、登場人物の環境や当該書が志向する美的雰囲気を醸し出している。『月見の友』（元禄十六年刊）は物語の要素がない教訓書だが、物質よりも花・紅葉を愛でる心を貴しとし、人生の年代を四季の推移に擬えた一文もある。本書は一年十二ヶ月の季節の推移に合わせ廓庵「十牛図」の趣意を説こうとしたものであり、禅語を用いず、各月の景物を描写することを主として一連の物語が進展する。末に二首の和歌を詠じることで文章の趣意と人物の心境を表している。仏教・儒教の要諦を平易に説いたもの、仏教教理を基盤に置いた仮名草子もあるが、禅宗の一書である廓庵「十牛図」を基にしながら、全く別趣向のものに仕立て、その趣意を一年十二ヶ月に配したところに本書の特色がある。寛永六年版本には各図に二首の和歌が掲載されていたが、「十牛図」の趣意を全て和文・和歌で表すという完全に和風化した点も注目すべきである。

最後に月坡の詩歌と本書の内容の関係について触れておきたい。月坡は本書執筆時の寛文八年、関山（逢坂山）琵琶苑に庵居しており、山水を友として生活をしていた時期にあたる。この折の詩が『菴居全集』（寛文十二年刊）に「関山琵琶苑居」と題した十首の連作がある。「其二」を二首掲出しておきたい。

悠然終日對關山　悠然として終日関山に対す
不要安心心自安　安心を要せざれども心自ら安じ
禪板蒲團總拈却　禪板蒲団総て拈却して
和風搭在竹欄干　風に和して搭在す竹欄干[17]

山に抱かれ自安して修行する心境を吐露する。こうした折に執筆されたのが本書であった。本書は四季の推移・景物を軸にして展開するが、そこには月坡の隠棲した地の光景も投影されていよう。また後年、水戸を去る折、人々との別れの際に詠まれた詩がある。

尋花追月是生涯　花を尋ね月を追う是れ生涯
水廓山村不問家　水廓山村　家を問はず
莫怪閑僧老多事　怪しむこと莫れ　閑僧老ひて多事なることを
擧頭今日亦西斜　頭を挙すれば　今日も亦た西斜　（『手ごとの花[18]』）

ここには自然の美を愛してやまない心持ちが示されており、月坡の詩人としての本領が述べられている。一方和歌を詠じては、

住はてぬ世をしれとてや時鳥市のかりやに音をつくすらん　（同　右）

と詠まれ、この世が仮の世であることを時鳥の声に聞く。前掲二首の詩に見られた、山に棲む境涯と自然を愛する心、

仮世についての歌を掲げた。『うしかひ草』は月坡の自然を愛惜する詩人・歌人の心を投影し一年の四季を描き、表現としては和文体・和歌という和の表現様式で本書が成立していることを最後に指摘しておきたい。

三、蘆庵の版本掲載歌に対する批評と自詠

蘆庵（一七二三～一八〇一）は十八世紀後半の京において、歌は自己の思いの表出を第一とすることを提唱した歌人であり、歌論書に『ふるの中道』（寛政二年成立／寛政十二年刊）、家集に『六帖詠草』（文化八年刊）『六帖詠草拾遺』（嘉永二年刊）がある。蘆庵には二種の刊本家集の基になった自筆本『六帖詠藻』（静嘉堂文庫蔵）が存しており、「雑十一」に寛永六年版『四部録』の「十牛図」に掲載され、以後の各版にも掲載する各図に附された歌についての批評があり、蘆庵の目から見て歌意が通らない歌には新たに詠作を試みた記事がある。[19] 近世期の歌人で「十牛図」版本掲載歌を批評するのは蘆庵が唯一であり、自詠も試みていることにも注目される。当該記事には前書が附されているが、それによると光禅師が歌について通じるものも不審のものもあり、蘆庵に通じないものは削り、新たに詠作することを乞うたことが記されている。冒頭に「そもく我宗門に唱るは、経外別伝不立文字云々。されば、第一義底は言句の及ぶ所ならず。言句は大二義門経説なり。是所謂月をさす指なるべし。」と禅宗の教義を記し、この後に、

むかし清居禅師、正法眼蔵を識得させんがため、衆生根機を観、病に応方をあたへて、画図十牛をあらはせり。これに郭庵（廓）遠和頌をあらはし、石鼓夷和をなして、ことぐ備れり。又何人か吾国振歌を配せり。男もじのかたき頌の心をわがくにの詞にやはらげたるも、老婆深切のあまりなるべし。

とある。難解な頌・和韻に趣意を理解しやすいように歌を附すのは「老婆深切」の至りであるとする。そして前記した光禅師に依頼された旨の言を記し、最後に歌は神代から伝わる本邦固有のものであり、「（上略）末世一家にたつる相伝をえてよみ、極微の茶香のたぐひと思ひ、あるは詞をかざりてもてあそぶ物と思ひ、伝をえざればよまれぬものと思へる、ことぐ〳〵く道をふみたがへたる也。」とも記す。相伝を得なければ歌は詠めず、詞を飾り翫ぶものと思うのは全くの誤りであるとする。これは蘆庵が堂上の伝授を否定する見解に基づくものだが、当該記事に事寄せて自身の歌論も付け加えている。

では「尋牛」から見ていく。

第一　尋牛

たづね行み山のうしはみえずしてたゞうつせみのこゑのみぞする

尋いる牛こそみえね夏山の梢にせみのこゑばかりして

たづぬるとは、人心六境に対し、心鏡くもらざれば尋る事はなし。しかはあれども、色に対しては色をおひ、声に対しては声を追ふ。是を楞厳にも、衆生迷悶して背レ覚合レ塵とゝきたまへり。ちりに合すれば、心鏡たちまちにくもり、くもれば外物うつらず、本心をうしなふなり。そのうしなひたる物をうしにたとへてよめるなり。歌の心はわがたづぬるうしいまだみえずして、せみのこゑばかり聞るよし也。二首とも心同じ。此まゝにて聞ゆ。うつせみとはからをのこしてぬけいづるものなれば、虚蟬といふ。虚はむなしといふ心、うつせみのむなしきからといひ、又なくともいふせみの名となれる也。

二首の歌については歌意が通じるとする。『首楞厳三昧経』の言句を引くが、駿陽山人も「背覚」楞厳四二曰「衆生迷悶シテ覚ニ背キ塵ニ合故ニ塵労ヲ発シテ世間ノ相ニ有ル」（原漢文）（『首書四部録』）と同経を引用し[20]、万安英

種も牛を尋ねることを「此牛ハ人々具足ヂヤホドニ元来失スルト云コトモナイゾ、ホドニ追尋テ何ニセフゾ。上ニ云如クナレドモ覚ニ背クニヨツテ牛ト疎ニナリ塵埃ニ理ルヽニ依テ牛ヲ失ルゾ。」（『四部録抄』）とする。[21] 経典の引用、当該図の趣意も近世前期の「十牛図」の注釈書と同一であり、蘆庵の当該図及び仏教の深い理解を窺わせる。

次に「見跡」には三首の自詠が見られる。

第二　見跡

心ざしふかきみ山のかひありてしをりのあとをみるぞ嬉しき

おぼつかな心づくしにたづぬれば行方もしらぬうしのあと哉

しをりと〔は芝折〕とかけり。おとかけるはあやまり也。山などに入てみちのさだかならねば、かへりいでんときまよはじとて、柴のえだなどを折かけてゆくをいへり。是は人の山に入時の事也。今たづぬるはうしなり。うしのさるわざして入べきことわりなし。あとゝは人のうへにも鳥獣にもいへり。み山とは太山とかく。きはめて深き山の事也。ふかきみ山とは重言也。

「心ざし歌」に対しては「しをり」を施した主体の曖昧な点を挙げ、「おぼつかな歌」に対しては「ふかき（深き）」と「み山（深山）」が重言になっていることを指摘する。この後に自詠が示され、

心ざしふかき山ぢのかひありて尋るうしのあとをみしかな

かくいひてうしの足あとをみ初て嬉しと思へる心は、いはでもこもれり。おぼつかなのうたは首尾とゝのはず。

おぼつかな心つくしてたづぬれどそこともしらぬうしのゆく末

此行はのせつかはさず〔「此行」ハ前後各一行ヲ指ス〕

かくいふ時はおぼつかなといふ詞かなへり。こゝは

あとみてもおぼつかなしや山ふかく入けんうしのゆくへしらねば

とあらば此所にかなふべし。

蘆庵の示す歌は確かに版本掲載歌に比べ歌意がより明解で詞の用法も正格である。このようにして蘆庵は版本掲載歌を斧正し新たに詠作を試みている。

第三「見牛」には自詠はないが、版本「青柳の糸の中なる春の日につねはるかなるかたちをぞみる」は「はるの日の」に直し、「吼けるをしるべにしつゝあらうしのかげみるほどにたづねきにけり」は初句を「なく声を」とすれば少しく優るとする。

第四　得牛

はなさじとおもへばいとゞ心うし是ぞ誠のきづなゝりけり

とりえてもなにかと思ふあらうしのつなひ〔く〕ほどに心づよさよ

言に雅俗なし、つかひざまに雅俗あり

はなたじと思へばいとゞ心うし是ぞまことのきづなゝりける

こゝの心は、たとへば色をおふて、わが心はうせたりとおもへば、色塵に心をそめじとおもふが、うしをはなたじと思ふ也。さはおもへどそみなれたる心なれば、そみやすければ、正と邪と相あらそふの意也

後のうた

とりえても猶心こそゆるされねつなひくうしのちからづよさに

かくあらばしかるべしと思ふに、思ひいでたるうたあり。こゝによくにたり

をりえても心ゆるすな山ざくらさそふあらしに散もこそすれ

版本歌「はなさじ」を詠み直し係助詞の呼応を正しくし、迷妄の基になる「色塵」を打ち払う「正と邪」の葛藤の場面とする。版本歌「とりえても」を新たに詠み直し「うしのちからづよさに（牛の力強さに）」と詠むことでより牛との格闘を全面に出している。「をりえても」歌は武道の心得を詠じた道歌である。

第五　牧牛

日かずへて野がひのうしもてなるれば身にそふかげとなるぞ嬉しき

尋ね来しまきの〔うねうし〕とりえつゝかひかふほどにしづかなりけり

初のうた大意は聞ゆ。歌よむ人のためにたゞしてみすべし。野飼とは農業のさはりにならぬ比、うしをやせさせじとて、のにはなちこふをいふ。これははじめうせたるうしにいへり。されどうせたるうしつなぎてなつくも、のがひをとりてなつくも大意同じとはいふ也。

うせにけるうしもみいでてつなげればいまは身にそふかげと成にき（つなぎたれば也）

後のうた

尋ねつる山のあらうしつなぎえて今はてがひになれにける哉

うねうしかひかふ心得がたし。

版本歌「日かずへて」は大意は通じるとし、「野がひ」も「はなちこふ」も同意としながらも新たに農作の観点から詠み直す。「尋ねつる」歌は版本歌にある「うねうし」「かひかふ」を「あらうし（荒牛）」「てがひ（手飼ひ）」の語に変えており、蘆庵歌の方が理解しやすい。

第六　騎牛帰家

すみのぼる心のそらにうそぶきて立かへりゆくみねのしら雲

かへりみるとを山みちの雪消て心のうしにのりてこそゆけ

初のうた、雲はあしたに山をいで、夕に山かへる。よりて歌のうへにて雲かへるといへば、夕といはでも夕になる也。このうたは人のかへるなり。上に心とあれば人の事と聞ゆれど、落句はみねに雲のかへると聞ゆ。

分きつる高ねの雲をめにかけて立かへりゆくみちぞうれしき

とあらば聞ゆべし。

次の歌、かへりみるといふは、にしにゆく人の東をみるをいふ也。しかればわがきたるかたなり。そのきたるかたのゆき消てゆけとあれば、又東にゆくなり。詞の道かくのごとくたゞしく、一字たがへば閃電光に似て、直下に意を転ず。是は、かへるさのとほ山みち、とあらば聞ゆべし。

版本歌「すみのぼる」については「立かへる」の主体が上句で人であることが示されているにもかかわらず、雲が夕べに山に帰っていくこととも取れると難じ、「分きつる」歌を新たに詠む。版本の歌は蘆庵の言う通り「立かへり」の主体が曖昧であり、蘆庵歌によって歌意が明確になったと言える。版本歌「かへりみる」に対し蘆庵は厳しく批判し、一字でも誤れば直ちに歌意が変わることに警鐘を鳴らす。蘆庵はこうした理に合わない歌作をすることを戒めた歌人であり、「いこま山高ねの月の入るまゝに氷消ゆくこやの池水。生駒は大和・河内の境の山なり、こやは摂津の西なり、此山に入る月は大和よりいはではかなはず。（＝割注）」（『ふるの中道』「ちりひぢ」）とした言があり[22]、地理的道理に合わない歌を批難する。上句を「かへるさのとほ山みち」とすれば理解できるとしており、蘆庵の一字をも忽せにしない歌作姿勢がここから見てとれる。

第七　忘牛存人

よしあしとわたる人こそはかなけれひとつなにはのあしとしらずや

しるべせん山ぢのおくのほらのうしかひかふほどにしづかなりけり

初のうた

捨妄取真　去事就理　捨煩悩取菩提　厭生死暮涅槃

よしあしを分るこゝろのあるほどはひとつなにはのあしとしらなん

と釈すべし、是と云、非と云は、ともに心のほがらかならぬなり、信心銘にも、至道無難唯嫌棟択但莫憎愛洞然

次の歌は第五と同歌なり、しるべせん、ほらのうしともに心得ず、せんとは人をしるべし、やらんの心なればたがへり

はなるとも又つなぐとも思はずはうしといふこともわすれはつべし

版本歌「よしあしと」歌について「捨妄取真……」の趣意を詠じたものとし、自詠には「信心銘」の冒頭を挙げ、是非に囚われる間は安心の境地ではなく、「好・嫌」「愛・憎」を去ることを第一とするという言句を補足する。版本歌「しるべせん」は蘆庵も疑問を呈するように第五図「牧牛」の趣意に相応しく、新たに当該図の趣意に一致するように「はなるとも」歌を詠み、牛（自己の心）に執着せず、彼我を失くした心境を詠み上げる。

第八　人牛倶忘

雲もなく月もかつらも木もかれてはらひはてたるうはの空哉

本よりも心のゝりはなきものを夢うつゝとは何をいひけん

初歌、月の桂と申事は兼名苑と申文に云、月中有レ河、河上有二桂樹一高五百丈云、是を本文として月の桂とは申ならへり。此心を思ふに、心中妄想うせて真如法性あらはれ、洞然たる所をいふ心とみえたり。是言語のたがへるなり。木はかるゝといふとも、月はかるゝといふべからず。月のかつらの木とつゞかざれば木にかゝらず。月は常住不変物、必ず晴くもりによるべからず。

へだてこし心のちりも雲きりもはれてむなしくそらをこそみれ

次のうたは、此まゝにてよく聞えたり。

版本歌「雲もなく」については『兼名苑』（散逸本）を引き、所謂真如の月を当該歌から詠み取る。その上で詞の用法の齟齬を指摘し、「月のかつらの木」としなければ意をなさないとし、自詠「へだてこし」を詠む。ここは蘆庵の指摘する通りであろう。自詠では「月・桂」を詠まず、一切の妄動がなくなったことを虚空を見ると表現する。

第九　返本還源

法のみちあとなきもとの山なればまつはみどりに花はしら露

そめねども山はみどりになりにけりをのが〔いろ〕〳〵花もなきなり

初の歌、よく聞ゆ。但是は古句の、やなぎはみどり花はくれなゐといふ古句をあしくつゞけたるまでなり。まつはみどりに花はくれなゐとなほして釈すべし。その故はしら露のしらは花の白きにて聞えたれど、露は何の用にいでたりともみえねば也。

次のうたの下句は一向不通

そめねども山はみどりになりぬればおのがいろ〳〵花も咲けり

是山はもと山、水はもと水、といふ底なるべし。

版本歌「法のみち」に対して歌意はよく通じるとするものの、「柳緑花紅真面目」（蘇東坡）を誤用しており、そのまま「花は紅」とすべきとする。併せて「しら露」の「露」は歌のなかで有効な働きをしてないとも指摘する。二首目の「そめねども」は全く通じないとするが、第五句「花もなきなり」は廓庵の頌「庵中不見庵前物　水自茫茫花自紅」と相反しており、当時の読者も不審を抱いたに違いない。よって蘆庵は「花も咲けり」と改めて詠み直す。前記川瀬一馬氏が紹介する大東急記念文庫の古写本の当該図の歌は「そめねども山はにしきになりにけりをのが色々花もさくなり」とあり廓庵の頌と相通する。[23] なぜ版本の歌が廓庵の頌と相反するのかはわからないが、蘆庵はその誤謬を訂正しているといえるだろう。

第十　入鄽垂手

手はたれて足はそらゆくをとこ山かれたる枝に鳥やすむらん

身もおもふ身をば心ぞくるしむるあるにまかせて有ぞあるべき

初のうた、無心所着とやはん。言路をうしなへり。本文入鄽垂手序とある。手は手足の手の事にはあらず。垂示といはんがごとく、又手段をいふがごとし。さるを手の事と思へるは、歌の理をしらねばなり。又足はそらなるといふ詞もたがへり。人あはてさはぎてみれどもみえず、きけども聞えぬ体のときありくを、足をそらにてありくといへり。こゝは大悟徹底の人却て入市中相対する邪魔外道悪人をもみなことゞく化度する体の心とみえたり。又頌の句に枯木再花咲とあるをかへて、鳥栖といへる文字にかゝはりて心をなさず。歌道の意大にたがへり。こゝは文殊三処一夏の心とみゆれば、今別詠之

十牛の歌をよめる中に、入鄽垂手の心を

けがれたるあくたにおける露をしも玉になしてぞ月はすみける

版本歌「手はたれて」を無心所着とし一首の体を為していないとする。「手」「足」も「入鄽垂手」の意義を理解しておらず、「足はそらゆく」の措辞も誤った用法であるとする。廓庵の頌「直教枯木放花開（直だ枯木をして花を放つて開かしむ）」の意を変えるが、結句「鳥やすむらん」の詞のため意をなさないとも評する。蘆庵は当該図を大悟の人が逆に市井に入り教化する趣意と見て「文殊三処」に譬え、文殊が夏安居のときおよそ修行にふさわしくない魔宮・長者宅・嬈房に過ごした、その自在無碍の境地と同趣とし、新たに「けがれたる」歌を詠じる。[24] 版本歌は確かに歌意を読み取るのが難しい。蘆庵は全く別趣向の歌を詠じており、塵芥に置く露を玉とし、清澄の月が宿ることを詠む。「文殊三処」と当該図の趣意が合致するかは別として、当該図の趣意を新たに和歌化しているといえよう。次に版本歌「身を思ふ」について、上句は第四図「得牛」の段階に通じ、最終図で「身を思ひ心をくるしむ」ることはないが、「未練未熟」のときの苦しさ思い返し、大悟して後の安らかな境地を他者に示したものとする。この後、

身を思ふ心ぞ身をばくるしむるあるにまかせてあらばやすけん（大欲 大苦 少欲 知足）

上に詞をかさぬれば下に又詞をかさぬ。是又うたの一体なり。〔歌の法とは思ふべからず。歌に法なし。古人如此よめる一体あるをいふ也〕。是は此言路の理をいふのみ。いかでか第一義底にいたらしめん、此道は不立文字、まして拙劣の鄙詞、是とゞめば則所謂葛藤とならん。

と自詠を附す。第五句を「あらばやすけん」と変えたのみだが、右に附される二字、大欲ゆえの大苦、少欲ゆえの知足は蘆庵なりの「十牛図」の示す修行過程を整理したものと思われる。

まとめ

以上、月坡と蘆庵の「十牛図」をめぐる作品について見た。月坡は廓庵「十牛図」の趣意によりながらも、新たに二章を設け、内容も序・頌・和韻から離れ、各章を一年十二ヶ月に配当し、各月の光景・景物を和文体で綴り、なお二首の歌を附しており、「十牛図」を完全に和風化していた。禅宗の教理・用語を表面に用いることなく、当該図の趣意を説こうとしている点に月坡の独創がある。このことは本書を読む一般読者に配慮しているともいえようが、若くして山居し山水を愛する詩作を多くものした月坡の個人的な志向も投影されているものと思われる。蘆庵の版本掲載歌を批評した営みは批評するのみに終わらず、新たに自詠を示しており、批評の言の中に蘆庵の実際の詠作姿勢、あるいは歌論を窺わせる言もあった。例えば「得牛」に「言に雅俗なし。つかひざまに雅俗あり」の言は同じく『六帖詠藻』に「今の世の歌は言えりのみして、常にみきくものも歌にはよめるをきかず。いにしへは大根はじかみにらなすびひかほしうりも歌にこそよめ」（雑九）とあり、言葉そのものに雅俗の別はないとする蘆庵の見解を補完できる記事も見える。[25]

この他近世期には叢書類に記される二種の作者未詳歌が存し、宝井其角の『五元集拾遺』には「十及の図」と題し「十牛図」を吉原の風俗にパロディー化した発句十句も見られる。本稿ではこうした作品にまで触れることができなかった。以後の課題としたい。

注

(1) 川瀬一馬「五山版「十牛圖」考」(『田山方南先生華甲記念論文集』田山方南先生華甲記念会、一九六三年)

(2) 鎌倉期に一山一寧の「十牛圖并序」(『一山國師妙慈弘濟大師語』)、南北朝期に竜湫周沢の「十牛」(『隨得集』)があり、近世初期の詩作としては隠元隆琦の「十牛圖」(『隠元和尚松隠三集』)、高泉性激の「十牛頌」(『高泉禅師語録』)がある。

(3) 『月坡禅師行実』及び『霊隠図詩』の自序による。(『続曹洞宗全書第三巻　語録一』曹洞宗全書刊行会、一九七三年)

(4) 岡田宜法『日本禅籍史論(上)』曹洞禅編』(井田書店、一九四三年)

(5) 柴山全慶「宇しかひ草に就いて」(季刊『禅文化』第7巻第1号、花園大学禅文化研究会、一九六一年一月)

(6) 注(5)に同じ。なお当該書は同氏著『十牛図増修版』(其中堂、一九六三年)に所収される。

(7) 柳田聖山「解題」(上田閑照・柳田聖山『十牛図—自己の現象学』筑摩書房、一九八二年)

(8) 中村文峰『禅書うしかひ草』(山喜房佛書林、一九八五年)

(9) 湯浅佳子「『うしかひ草』と「十牛図」「牧牛図」」(『近世小説の研究—啓蒙的文芸の展開—』所収、汲古書院、二〇一七年)

(10) 駒澤大学図書館所蔵『絵入牧草』(寛文九年刊／西田庄兵衛版)請求記号、H180/288。但し当該書の損字の部分は同図書館所蔵『牧草』無刊記本(請求記号、188.84/963)に拠り( )内で示す。

(11) 注(9)に同じ。

(12) 注(5)に同じ。

(13) 『讃岐典侍日記』『徒然草』は新編日本古典文学全集による。

(14) 林羅山『徒然草野槌』(徒然草古註釈集成『徒然草拾遺抄　徒然草野槌』日本図書センター、一九七八年)

(15) 高野辰之編『日本歌謡集成　巻七』(春秋社、一九二八年)

(16)『紀海音全集　第一巻』（清文堂版、一九七七年）
(17) 駒澤大学図書館所蔵『菴居全集』（寛文十二年刊）請求記号、H152.1W/4。
(18) 駒澤大学図書館所蔵『手ごとの花』（元禄期刊）請求記号、H152.1W/43。
(19) 本文は、蘆庵文庫研究会編『小沢蘆庵自筆　六帖詠藻　本文と研究』（研究叢書486、和泉書院、二〇一七年）に拠る。
(20) 早稲田大学図書館雲英文庫蔵本。請求記号、文庫31 E1087。
(21) 国立国会図書館所蔵本。請求記号、821-277。
(22) 日本歌学大系第八巻。「いこま山」歌は長方集（八九番歌）に見える。
(23) 注(1) に同じ。
(24) 当該歌は『六帖詠草』雑上に「十牛の歌をよめる中に入鄽垂手の心を」と題し掲出される。一七七二番歌。
(25)『ふるの中道』「ちりひぢ」には「或は家々にて、不庶幾の詞、加難の詞などやうの事いでき、甚しきに至りては、伝授・口伝家説などやうのことさへいできにけり。是をしりたるを堪能・博覧と思ひ、これをしらざるを、未練・未達にて、歌詞にあらず、歌道をしらぬなどいひあへり。見よ、伝授・口伝をえし人の歌の聞え難きを。」（日本歌学大系第八巻）とある。

※引用の資料には旧字・異体字を通行の字体に改め、私に濁点・句読点を施した部分がある。引用の和歌は断りのない限り新編国歌大観に拠る。なお、版本の「十牛図」は駒澤大学図書館所蔵『四部録』（寛永六年刊／請求番号、188.84/574）に拠った。

〔付記〕貴重書に指定される月坡道印著・観海画『絵入牧草』の閲覧・複製及び図版の掲載をご許可下さった駒澤大学図書館に深く感謝申し上げます。